



# 長倉三郎先生の想いを受け継ぐ

Yoshimitsu KOBAYASHI 小林喜光 日本化学会会長、三菱ケミカルホールディングス取締役会長

日本化学会名誉会員、元会長の長倉三郎先生が2020年4月16日に逝去されました。享年99歳であられました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

長倉先生のご専門は分子科学で、1966年に「分子の電子構造ならびに分子間の相互作用に関する研究」で日本化学会賞を受賞されました。その後、1970年に本会のBCSJ編集委員長、1984年には会長にご就任いただきました。

日本化学会会長在任中には、化学の発展ならびに若手の化学系人材の育成にご尽力され、本会会誌にも多数ご寄稿いただきました。ここでその一部をご紹介いたしますと、「時評 これからの化学に期待するもの」(化学と工業 1985, 38, 81)では『社会が高度化するに伴って、利用される物質材料に対しても、たとえば電子素子の最近の進歩の動向からも明らかなように、機能の高度化、特殊化、多様化の要請と期待が強まってくる。こうした期待と要請に応えるためには、一方において、化学者は積極的に境界領域に進出し研究分野を拡大すると共に、他方、物質系の分子設計、反応設計に関する知識の蓄積を進めなければならない。』と述べられております。また晩年のご著書である「『複眼的思考』ノススメ～調和が必要な変革の時代を迎えて」(くもん出版)では『自然科学者自身も、自分の研究手法を応用しながら、政治や経済など異分野の面に幅広く関わって提言していくことが求められています。』と書かれております。長倉先生がご指摘された異分野進出・連携の重要性はますます高まっており、昨今のパンデミックでは「政治家と科学者の関わり方」が社会から問われました。パンデミックや地球温暖化を含め、地球規模の課題の解決のためには分野の垣根を越えた協創が必要です。これからの科学者には自分自身

の専門性を深掘りすることはもちろんのこと、他分野連携にも積極的に取り組み、相互理解を深めてオープンイノベーション、社会実装を推進していく姿勢が欠かせないと思います。本会としてもこれまで以上に、異領域(学問間、産学官、国内外)との連携・融合を推進してまいります。

また先般、長倉先生のご遺族の方から本会に「学問の発展にお使いいただきたい」と、ご遺産寄付の申し出をいただきました。長倉先生のこれまでのご活躍を振り返ると、総合研究大学院大学の創設にご尽力され、優秀な若手研究者を称揚する場を提供すべく長倉研究奨励賞(当時)の設置にも取り込まれるなど、日本化学会会長退任後も引き続き次世代人材育成に力を尽くされました。そこで、長倉先生のこの想いを受け継いで若手の人材育成に資する形でこのご寄付を活用できないかと考え、長倉先生ともご縁が深い物質・材料研究機構の橋本和仁先生や分子科学研究所の川合眞紀先生にもご相談し、日本化学会の賞の1つとして新たに「長倉三郎賞」を創設することといたしました。授賞対象は化学に従事し独創性、将来性のある優れた研究成果または業績を挙げた者とし、毎年1名以内、表彰楯のほかに副賞として1000万円を授与することといたしました。このような副賞を設けることは本会として初めての試みとなります。この賞の創設によって、若手研究者には今まで以上に常識に真っ向から挑戦し、独創的な研究に励んでもらうことを期待し、そして長倉先生のご功績が永く知れわたることを願ってやみません。

日本化学会を代表して御礼申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます

© 2021 The Chemical Society of Japan